

ランンキュラスの切花促成栽培における地温が開花に及ぼす影響

○本田由美子・福元孝一（宮崎総農試）

Effect of soil temperature on flowering of forcing culture *Ranunculus asiaticus*.

Honda, Y. and K. Fukumoto.

【目的】ランンキュラスの切花促成栽培は、球根冷蔵処理後 10 月上旬に本圃に定植する。しかし、定植初期は高温になることもあり、活着不良や切花の品質低下への影響が懸念される。そこで今回は、定植から 1 番花開花までの地温が生育および開花に及ぼす影響を検討したので報告する。

【材料及び方法】品種は極早生系品種‘エムホワイト’を用いた。球根はパーライトを充填した 7.5cm ポリポットに植え、暗黒 5℃の冷蔵庫内で 5 日間吸水させた後 10℃で 5 日間芽出し処理を行い、再び 5℃で 3 週間冷蔵処理を行った。冷蔵処理後は昼温 25℃、夜温 15℃の冷房ハウスで 8 日間順化を行った。試験は人工気象室内で行い昼温 23℃、夜温 18℃とした。地温は土壤恒温槽を用いて区ごとに 19℃、22℃、25℃とした。

順化した株は土壤恒温槽の 1/2000a ポットに定植し、1 ポットあたり 1 株定植した。ポットの底には 10 の大粒ボラを敷き、その上に市販の野菜用床土と微粒ボラを 2:1 で混合した培土を充填した。試験は定植した 2007 年 10 月 15 日から 12 月 3 日まで行った。試験規模は 1 区 3 株 2 反復とした。

【結果及び考察】定植直後の活着不良や芽の焼け等はいずれの区も見られなかった。1 番花はいずれの区も 11 月上旬に抽だいし、11 月下旬に開花した。1 番花の抽だい日および開花日は地温による差はほとんど認められなかった。しかし、抽だいから開花日までの日数は地温 19℃区が 23 日、22℃区が 20 日、25℃区が 18 日と地温が高いほど短い傾向が見られた（第 1 表）。1 番花の切花長は地温が低いほど長く、地温 19℃区は地温 25℃区に比べ 8 cm 長くなった。また、地温 19℃区および 22℃区は 25℃区に比べ切花重が重く、茎径も太い傾向が見られた（第 2 表）。開花時の株の大きさは 19℃区および 22℃区では差がないが、25℃区では他の区に比べ株が小さいことが観察され、試験終了時の根量も 25℃区が他の区に比べて少なかった（データ略）。

以上のことから、定植から 1 番花開花までの地温が高いほど抽だいから開花までの日数が短く、切花長および茎長が短く、茎径が細い傾向が見られ、気温だけでなく、定植時の地温が 1 番花の開花や切花品質に影響を及ぼす事が明らかとなった。

第 1 表 地温の違いがランンキュラスの平均抽だい日及び開花開始日に及ぼす影響<sup>z</sup>

地温	1 番花抽だい日	1 番花開花日	抽だいから 開花までの日数 (日)
19℃	11 月 5 日 ± 2 <sup>y</sup>	11 月 28 日 ± 3	23
22℃	11 月 6 日 ± 2	11 月 26 日 ± 4	20
25℃	11 月 7 日 ± 3	11 月 25 日 ± 5	18

Z: 品種‘エムホワイト’, 定植日 2007 年 10 月 15 日, 昼温 25℃ 夜温 18℃

y: 平均 ± 標準偏差

第 2 表 地温の違いが 1 番花の切花品質に及ぼす影響

地温	切花重 (g)	切花長 (cm)	茎長 (cm)	茎径 (mm)	側枝数 (本)
19℃	4.0 ± 0.9 <sup>y</sup>	42.8 ± 5.1	40.2 ± 5.0	2.5 ± 0.3	0.0 ± 0.0
22℃	4.4 ± 1.1	38.3 ± 4.6	35.9 ± 4.3	2.6 ± 0.5	0.3 ± 0.5
25℃	2.4 ± 0.5	34.8 ± 5.8	32.3 ± 6.1	1.9 ± 0.4	0.0 ± 0.0

Z: 平均 ± 標準偏差